
武装神姫サバゲーマーズ

二等海士長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫サバゲーマーズ

【Nコード】

N7854Y

【作者名】

二等海士長

【あらすじ】

時は西暦2040年。

主人公、小松野陸郎はサバゲーマー。ある日、大きなトイガンを買うつもりが、気が付けば手に入れたのは手乗りサイズのフィギュアロボだった。

全長15センチの神姫と呼ばれるフィギュアロボは、サバゲーマーの下で新たな戦場に立つ。

サバゲーマー、神姫を買う（前書き）

2040年ともなれば、サバイバルゲームも様相が随分変わる。インカムの使用こそ禁止されてはいるが、サポートドローンやラジコン兵器による攻撃は容認されるようになっていた。そして

サバゲーマー、神姫を買う

壊れているような音をたて開いた自動ドア。そこからボビーショップ『コリドー』に入って来たのは、年の頃は二十代半ばの男だった。

レジに立つ店主のギョロリとした目を見据えながら、男は歩み寄って口を開いた。

「金是用意できた。約束の物を渡してもらいたい」

持っている鞆からそこそこ厚みのある封筒を取り出して、男はどこか浮き立つように言った。だが、店主はそんな男に対して申し訳なさそうに言う。

「すまないが、アレはもう売れてしまった。諦めてくれ」

店主の言葉を受け、男は一瞬キョトンとし、次に眉間に皺を寄せた。

「どういう事だ？ 口約束とはいえ、確保キブしておくように頼んだじゃないか」

「小松野には悪いが、倍の値段をつけられた。こっちも生活かかってるんだ」

「倍の値段って、60万円？」

小松野と呼ばれた男は一瞬呆け、店主の首肯を見て、やや落ち着いた。

倍の値段を付けられては仕方無い。金持ちには勝てないのだ。

「だがまあ、利益の半分は私に権利けんりがあるだろ？」

「まあ、ね」

利益の半分を寄越せ、という要求を受諾する店主。そこに、小松野はさらに主張を加える。

「それと、楽しみにしていたのにキャンセルされたダメージに対する慰謝料10万円だな」

「待て……2万円だ。2万円です」

無茶苦茶な要求だが、今後の商売のこともある。店主も詫びは必要だと考えてはいた。だが、10万円は高すぎる。

「金だけではなあ」

呟いて店の奥へと移動を開始した小松野と次の手を考える店主の間は緊張感がみなぎり、火花が散る。

だが、唐突に店の奥から歌声が聞こえてきた事により、そんな空気が打ち砕かれた。

「は？」

『ラ、ラララ』

小松野の視界には、身長15センチ程の小人が自分の身長程もある箱を運んでいる姿が映った。

「店主、あれは何だ」

「知らないのかい。神姫だよ」

神姫、それは手のひらサイズの自律ロボット。

『人類の新たな友人』を目指し、軍事ロボから介護ロボまでを製造する変態企業と、ゲームから地球環境シミュレーターまで手掛ける変態企業との協力により誕生した大量破壊兵器……もとい、フィギュアロボット。

軍事技術と医療介護技術の応用で、サポートロボットとして非常に高い能力と相応のお値段が特徴だ。ちなみに、ランニングコストはそこまで高くはない。

しかし、そんな最先端のロボットが、前世紀の遺物が売り場の大半を占拠している模型屋に居るのは不可解であり不釣り合いである。「どうした、店主。サポートロボットが必要な歳でもなし。店も一人で手が足りるだろうに」

不思議に思って尋ねる小松野への店主の答えはこうだった。

「客引きになるかと思っただけで展示用に仕入れたんだ」

店主が言うには、模型とトイガンだけでは売り上げが厳しいので、最近流行り始めた神姫バトルに乗っかるうとしたらしい。

しかし、初期投資金額の高さがネックとなり、ある程度しか売り

上げは伸びず、客足も今は落ち着いてしまったという。

「店頭ディスプレイも、今は神姫ネットのバトル中継があるから意味が無くってなあ」

店主はそう言っ、店の角にある古ぼけたブラウン管テレビを指差した。

画面の中では、『最新型アーヴアルMk？特集』という番組が流れ、白っぽいフィギュアロボットが模擬戦を行っていた。

わざわざ店頭で見なくても、お茶の間で神姫は見られる。展示の意義は失われ、展示神姫はメーカーに返品される事になった。

「…と、いうわけだ」

「なるほど、よく分かったよ」

つまり、尽力はしてくれたけれど、微力すぎて役に立たないからもうイラネーヤ、ということだなと、小松野は解釈した。

「しかし、これはなかなか」

小松野は荷物をまとめているらしき神姫を眺めてその動作に感嘆した。

動きは滑らか。声も人間と変わらず。今しがたテレビで流れていた番組の通りなら、戦争ゴッコまで可能。

「神姫ってリアルで武装化出来るのかね？」

「そりゃあ、出来るさ。去年まではリアルファイトが主流だったぐらいだから、剣とかライフルとか……買うのか？」

「さてね」

小松野は考え込んでいた。

優れた兵士は優れた兵器に勝る。

手元には、今は亡きアサヒファイアーアームズのM60を手に入るために貯めた30万円がある。M60は確かに優れた機関銃だが、いわゆる骨董品だ。

目の前には、優れた兵士の素質を持っているであろうフィギュアロボがいる。

「いくらだ？」

店主の問い掛けから随分と間が開いたが、それは「買う」という意味の反応だった。

「素体と充電器のセットで2千神姫ポイントだ」

「にせんしんき？ なに？」

「神姫ポイント。神姫関連で使う通貨みたいなもんだ。1ポイントは百円だ」

つまり、神姫1体20万円也。

「たけえよ」

「馬鹿言え。自律ロボットが手のひらサイズに纏められてるなんて、四半世紀前なら億単位だぞ」

確かに店主の言う通りだった。だが

「店頭で展示してたという事と返品予定を聞く前ならな。それに、少し前の型なんだろ」

「あ？ あの神姫エウクランテを買うのか？」

エウクランテというのか。と、小松野は店主に頷きながら思った。

「同じタイプの箱入り新品もあるが……」

「メーカーに返品されたら彼女はどうなる？」

「恐らく廃棄処分だろう。メーカーは中古品を取り扱わないからなら、決まりだ」

小松野は店主に金の入った封筒を押し付けて言った。

「装具一式。それともう一体に装具一式。幾らに抑えられる？」

「50……いや、45万。今日の事を水に流して貰えれば40万でいい」

店主のその言葉に、小松野はゆっくり頷いた。

店主に案内され、小松野はマスター登録用の機械でマスター登録を行う。

今日持って来た30万円と、店主との交渉で得た17万円、合わせて47万円を神姫ポイント化し、4700ポイントを得る。

4700ポイントから、神姫2体分のポイントを引くと700ポ

イント残る。

「700ポイントでも大した装備は買えないんだな。と、いうか、値段が高過ぎないか」

手続きの間は暇なので、側にあったカタログをパラパラと読んでみた小松野は武装の値段に驚いた。カットラスや十手が200ポイント、つまり2万円もするのだ。

「そりゃ、リアルファイトでもバーチャルファイトでも使える武器はな」

手続きを終えた店主が包装された神姫2体と武装セットを持って小松野の後ろに立っていた。

「バーチャルとかリアルとか、関係あるのか？」

「あるさ。リアルファイト用は強度を持たせつつ、剣なら刃を潰し、銃器の威力はエアガン以下。バーチャルファイト用は、エフェクトの設定とか威力、重量の設定とか。色々面倒くさいんだよ」

バーチャルファイトのみならデータ以外必要ないので安い。だが、小松野はあえてリアルでも使える武装を選ぶ。

神姫バトルをすれば、ポイントは百ポイント単位で入ってくるといので、小松野は深刻に考えなかった。

「とりあえず、今日は帰って神姫を起動させてみよう」

小松野は、いそいそと自宅へと帰っていった。

サバゲーマー、神姫を買う（後書き）

エウクランテはリペイントもいいな、と思うのです。

1：悩み事はリア充の証（前書き）

サポートドローンとして神姫に目を付けた陸郎。
高揚ウキウキしながら神姫を起動しようとするが……

1：悩み事はリア充の証

彼の名前は小松野陸郎^{こまつのろくろ}。しがない喫茶店店員で、趣味はサバイバルゲーム。そして、今日は神姫のマスター初日となる。

さて。実は神姫を買って帰ってから2時間も経つのだが、陸郎は未だに神姫を起動させていない。なぜかって？ 名前が決まらないからだ。

「ウムム」

陸郎の目の前には名前入力を待つエウ克蘭テ型神姫。名前さえ決まれば、すぐに起動させられるのだが。

陸郎は店主が「エウ克蘭テ」と言っていたので、それがこの神姫の名前だと勘違いしていた。

自分でも分かる程にネーミングセンスが無い陸郎は、ネットでエウ克蘭テ型と名前の情報を集めた。

その結果

「セイレーン関係無いな」

神姫バトルにおいて、エウ克蘭テ型はセイレーンタイプというのを置き去りにして、どちらかといえば鳥類のように戦っているようだった。

「だったら、空に関連した名前か」

パソコンに空、ソラ、スカイ、と、適当に言葉を打ち込んだ陸郎は、翻訳ソフトが提示した一語に目を止めた。

「シエル」

パソコンと神姫の横たわる充電器 クレイドル の端子を接続し、神姫の名前^{シエル}を決定する。

『エウ克蘭テ型で決定しますか？』というシステムからの質問に、陸郎はYesを選択して答える。

そして、彼女は目覚めた。

「マスター？」

「そうだ」

「初めまして、じゃあないんだよね」

店で稼働中の彼女を見ていたので、陸郎は頷いた。

「そう……。うつすらとだけ覚えているの。マスターが来なかったら私は」

シエルは立ち上がると、クレイドルから歩き出て、パソコンのキーボード上に置かれていた陸郎の左手にしがみついた。

「ありがとう、マスター」

「ああ。これからよろしくな、シエル」

そう言いながら陸郎は、空いた手でシエルの頭を撫でる。シエルはうつとりとした表情を浮かべると、まぶたを閉じて

「こちらこそよろしく、マスター」

そう言つて、スリープモードに入った。

「初回起動時等はバッテリーを大量消費する、か」

陸郎はシエルを優しく持ち上げてクレイドルに横たえると、不要だと思いながらも布を掛けてやった。

そして、パソコンに向き直る。

「さて、どういふつもりなんだか」

陸郎が開いたページは神姫の情報交換を主に行うサイトだった。

その中でもアーンヴァルMk?のページを開く。

ボビーシヨップ『コリドー』の店主から陸郎が巻き上げた2体の神姫。そのうち1体はエウ克蘭テ型のシエルだが、もう1体はなんと、3日前に発売されたばかりの最新型アーンヴァルMk?だった。

陸郎はてつきり不良在庫を押し付けてくるかと思っていたので驚いた。渡されたのがアーンヴァルだと気付いた時点で『名機らしいけど、店主も随分前の機体を仕入れたもんだ』と思い、家に帰って箱を良く見て、無印ではなくMk?だと気付いた時点で『コリドー』

に電話した。

ひょっとして間違えて渡したのではないかと尋ねる陸郎に、店主は『いやー、欲しがる人って予約してもう買ったし、新規顧客の開拓もウチにはムリだしで、つまり残ってるんだよね』と、のたもつた。

基本的に、神姫は値段が一律2千神姫ポイントなので、最新型のMk？も無印トランシェー1も値段は同じ。だから、店主としてはどの神姫を渡しても変わらなかったのだ。

貰う方としては値段が変わらないならより良いモノが欲しいので、陸郎はありがたく頂戴しておいた。

だが、やはり何かしっくりこないのと、名前を決める材料にするためにアーンヴァルの情報を集めている。

「しかし、役に立たんな」

まだ新型だという事もあってか、サイト情報は見た目の事ばかりで、大した情報はなかった。

「しかし、白子煮とかザイコって徒名はどこから付いたんだか」

陸郎はアンチスレのページを閉じて神姫周辺機器の情報サイトに目を通し、クレイドルに布をかけると発火の危険性すらあるという情報を見つけて慌ててシエルにかけた布を取り去り、今度は神姫用のベッド型クレイドルを探すのだった。

「ヴィルヘルミーネ、入力っ」と

とりあえず名前の見当をつけた陸郎は、アーンヴァルMk？をクレイドルに寝かせてパソコンに接続し、名前入力画面に名前を打ち込んだ。

まだ起動はさせない。2体も同時に運用できる程の経済的な余裕はないし、そんな必要性もない。

時計を見れば既に夜である。陸郎は夕食を買いに近くのスーパーへ向かった。

買い物を終えた陸郎は日が落ちて暗くなった家路をノンビリ歩いていた。

以前なら気にもしていなかったのだが、今日は神姫を連れた人が良く目に付く。

「なんだかんだ言つて、良いもんだよな」

心の持ちようのせいだろうか。陸郎には、周りの神姫連れの人間全員が幸せそうに見え、その中に自分が加わる事に高揚感を覚えていた。

「ただいまー」

「あ、マスター。おかえりなさい」

家に帰った陸郎をシエルが玄関で出迎える。『ただいま』と『おかえり』のやり取りだけでも、陸郎の心はウキウキした。

しかし、浮き立つ陸郎とは裏腹に、シエルは浮かない表情で、どうかしたのかと陸郎が尋ねる前に頭を下げた。

「ごめんなさい、マスター！」

「は？」

玄関で靴を脱ぎかけた陸郎は、思わず手を止める。

そこには、未だにクレイドルに横たわっているはずのアーンヴァルMk？が、シエルの後ろからひょっこりと姿を現して陸郎を見上げていた。

澄んだ水色の瞳と視線が変わる。

「あなたが、私のマスターですね？」

疑問質問ではなく確認行為。視線に込められているのは好意が興味か分からずに、陸郎はただ頷いていた。

1：悩み事はリア充の証（後書き）

次回予告。

予期せず神姫を2体とも起動してしまった陸郎。仕方ないので2人ともサバイバルゲームのチームメイトに紹介しに行く。

次回、『頭上の神姫』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7854y/>

武装神姫サバゲーマーズ

2011年11月23日13時45分発行